

5月19日（木）

おはようございます・

iPS 細胞でノーベル賞を取った山中伸弥教授は、もともと現場での医者になることを目指していました。しかし腕が悪かったためにこれでは通用しないということで、病院の世界から出て研究の方に向かったのです。アメリカに留学することになると、ものすごく不安でした。医療の現場で、挫折して遠回りをしていたからです。ところが、アメリカに行ったらその遠回りをしてきたことが、むしろ経験値が高いということで評価され、ストレートに行った人より大事にされたというのです。

こういうことはアメリカに限らず、これからの時代をよく物語っていると思います。どこの大学を出て誰々さんの息子であってというようなことだけではなくて、どういう人間であるのかということが、赤裸々に問われる時代です。要するにその人の内容や経験値の高い人が求められるのです。

前に木山啓子さんのお話をしたことがあります。スリランカで津波によって家族を失ったお父さんがどうやって自分を立て直していったかという話、同じように家族を失った子どもの世話をすることによってであったという話をしたときに紹介をしたあの木山啓子さんです。彼女は、今「特定非営利法人ジェン（JEN）」の事務局長をされていて5、世界中で250人以上のスタッフを統率、指揮しています。彼女がそういう仕事をするきっかけは何だったかという話をします。

彼女ははじめ、彼女の上司とぜんぜん反りが合わなかった。それでこの上司と接触をもつことがとてもつらかった。上司は自分のことをいじめようと思っているわけではないが、少なくとも自分を要らないと思っていることが、はっきりと分かった。もちろん大人ですから露骨なことはしません。それで、ある日の月曜日に出勤するとき胃が「きゅっと」痛くなった。あの上司とまた一週間一緒に過ごさないといけないのかと思ってね。二年ほど勤めたときのこと、上司からジェンの事務局長として現場に出てみないかと言われた。

「この上司と離れることができるなら」と思ってその話を受けた。受けて現場に行ったら10人のボランティアがいた。10人中8人は英語が話せたが、2人の女性は話せなかった。そのときのことを彼女は次のよう言います。

上司から君は要らないと思われていた二年間の経験がなかったら、おそらくその二人に最初から引導を渡していたでしょう。つまり英語もできずに何が世界経験ですか、もう一回出直してきなさいと。あるいは困った二人を預かってしまったなあと思っていたら。しかし二年間要らないと思われた苦い経験があったお陰で、この二人をどういうふうにして生かしてあげようかと、最初から思うことができた。保母さんの方は、戦災や親を失った子どもの世話をしてもらったことになった。また看護師の人は、野戦病院のなかで、病人の世話をしてもらった。それで二人とも大活躍をした。もしも、二年間

上司に要らないと思われていたその経験がなかったら、あの二人を人間的に殺してしまっただろう。あの二人をどういうふうにするかということが分からなかったからと、彼女は私に言いました。しかし二人を活躍させることができたことで、ボランティアを上手に使うコツというものを覚えたので、ジェンが全世界で活躍できる組織になったのです、とも。

上司に要らないと言われ続けていた二年間、あの上司のせいで自分の人生はひどいことになったというのも事実であり、一つの考え方です。しかしまた、要らないと言われたあの二年間のお陰で、要らないと言われる側の気持ち分かって、逆にそういう人をどのように生かして使うかという視点を持つことができた。だから、あの二年間は自分にとって有意義であったと考えるのも一つの真実です。そうだけれどもどちらが大切かという、おそらく後者でしょう。

人生ではさまざまな経験をするものです。本来しなくてもいいような経験をすることもあっていいでしょう。しかしそれをこころの肥やしに変えられるかどうかは、自分次第なのです。エスカレーターに乗っているかのようにうまく事が運ぶ右肩上がりの時代で、いい大学に入っていい会社に勤めたら死ぬまでそこで働けたという時代なら何の問題もないかもしれない。だけれども、現在は大変変化の激しい時代です。自分がしんどくてもさまざまな経験を積んでおくことは悪いことではありません。むしろそれを自分のこころの肥やしに変えることができれば、他人とは異なる経験を積んでいることになりません。

山中伸弥教授が、挫折して遠回りしてアメリカに行ったので、アメリカ人からそういう扱いを受けると思っていたけれど、その経験を赤裸々に伝えたら、それを経験値としてむしろ評価されて、大学からスムーズに進学したものよりも、多くのチャンスをもたらしたという。

現代は、こういう時代なので、諸君はさまざまな経験を積むことになるとは思いますが、苦い経験でも自分の頭を上手に切り換えて、こころの肥やしにできるかどうか、これが21世紀を生き抜くポイントです。希望のなかに幸福を見出すというのが、清風の考え方です。さまざまな経験を自分のこころの肥やしに変えられるかどうか、短いスパンで考えたらしんどかったことでも長いスパンでみたら、そうではなかったということがあるということを、覚えておいてください。

正しい判断力と鋭い断行力を実施できるかどうかということは、それぞれのその時々でのそのひとの問題ですが、さまざまな経験を積むことは決して悪いことではありません。しんどいことであっても、やがて身の肥やしになって、自分のこころを成長させてくれるものだと、ピンチもチャンスになりうるものだとすることをよく自覚して、一日一日を送って下さい。

今朝の話はこれで終わります。

(学校長)